



Title	夏目漱石作品の研究 : 対照的に描かれる男性たちを中心として
Author(s)	Wiriyenawat, Piyanuch
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33842
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (ウィリヤェナワット・ピヤヌット)

論文題名

夏目漱石作品の研究

—対照的に描かれる男性たちを中心として—

論文内容の要旨

夏目漱石の作品の男性主人公を軸に論じている多くの先行研究では、圧倒的に作中の煩悶している男性の主人公が注目されており、作家自身の体験を投影した作品であると結論付けられている。とりわけ、「修善寺の大患」後、漱石の作品は作風が変わり、『彼岸過迄』、『行人』、『心』は漱石の後期三部作と位置付けられ、これ等の作品における「漱石の人物」である「煩悶している男性の主人公」に重点が置かれている。結果として、作品の主題は主人公たちが抱える「現代知識人の苦悩」であるという読みで終始している。だが、「煩悶している」男性主人公が登場する作品には、それらの主人公と対照的な性格の人物として設定されているもう一人の男性の登場人物がいる。例えば、『彼岸過迄』における敬太郎である。敬太郎について描かれている作品の前半は、先行研究であまり重視されていない。本論文では「煩悶している男性」と対照的な性格に設定されている男性の登場人物たちが作品においてどのように位置づけられるかという観点で作品を考察した。

本論文では、漱石の後期三部作品のみならず、漱石の前期作品も視野に入れ、煩悶している男性と性格が対照的に設定されているもう一人の男性が登場する『彼岸過迄』、『野分』、『虞美人草』、『行人』という漱石の四作品を中心に論じた。それぞれの作品において「呑気」な「男性たち」がどのように描かれているのかを考察した。以下のことが明らかになった。

『彼岸過迄』では、「敬太郎」の人物造形について考察することによって、漱石が、敬太郎という登場人物を描く上で、独歩の作品である『非凡なる凡人』及び、ステューブンスンの『新亜刺比亜物語』の影響を受けていることが分かった。また、本作品において頻繁に用いられている「とぐろ」のイメージに着目すると、敬太郎と須永の両方に「とぐろ」のイメージが適用されていることが分かった。二人は同様に「とぐろ」の状態であるものの、世間という外からの「刺戟」に対する敬太郎と須永の反応の相違は明らかである。「冒険」に憧れていた敬太郎は「停留所」での事件を経験した後、「冒険」という「非現実的な世界」ではなく、実際の世界に向かうようになっていく。一方、須永は外からの「刺戟」に耐えることができず、それを受けると自分の中に引っ込み、自分から世間との交渉を絶ち切ってしまう。さらに、「理想」に捕らわれる青年とは対照的な女性の登場人物に注目することによって、敬太郎や須永といった自分の世界及び思想にとらわれている男性たちの姿をより明確に描き出すために、世間という現実をそのまま見る松本の妻という女性の登場人物が対照的な存在として設定されていることが分かった。

次に、『野分』について、本作品は金銭世界及び、その世界に閉ざされている男性たちについての物語であることが分かった。そして、道也と高柳という人物以外に、中野という青年も重要な登場人物であることを明らかにした。中野は単なる「点景人物」ではなく、「実業家」の代表者として高柳を金銭的に補助する役割も担っている。さらに、中

野と高柳の関係を再考察することによって、物事に拘泥する青年と拘泥しない青年の人物像が浮き彫りになった。物事に拘泥する青年は結局「孤独」で世間に入り込めず、悩みを抱きながら自分の世界に閉じ込められてしまう。このような構図は漱石の『虞美人草』と『行人』にも見られる。ただし、『虞美人草』と『行人』の場合は、煩悶を抱く男性の登場人物たちは皆金銭的に恵まれているのに対し、『野分』では、煩悶を抱く登場人物が貧乏な人物として設定されている。最後に、「窓の外」を眺める行為について考察することによって、中野、高柳、道也の三人はいずれも自分の世界に閉ざされている状態であることが分かった。すなわち、三人は自分の世界もしくは思想に閉ざされている「空想の子」であると言える。一方、自分の思想にとらわれず、金銭の大事さを分かっており、世界をそのまま見る女性の登場人物である御政が、男性の登場人物と対照的な存在として設定されていることも読み取ることができた。

『野分』に近い時期に発表された『虞美人草』は従来、「勸善懲悪」の話として、あるいは、藤尾の存在を中心として読まれてきたが、宗近、甲野、小野という男性の登場人物の行動に着目すると、別の読み方ができた。つまり、本作品は無力で、他人に動かされない限り行動を取れない青年たちの物語である。「行動家」という性格に設定されている宗近と、考え込む「哲学者」である甲野には、見かけの違いはありながらも、共通点があることが明らかになった。さらに、エリートの小野でさえも、決心が必要な時になると、戸惑ってしまい、無力な姿を見せる。それに対して、男性側に批判される「私の強い」藤尾あるいは藤尾の母の行動に注目すると、自分の目標を達成するために様々な行動を起こし、自分の意志で動いていく存在として女性たちが描かれていることが分かった。

最後に、後期三部作の一つである『行人』について論じた。この作品は従来、一郎という登場人物を中心に論じられてきたが、二郎という登場人物に注目することで、新たな読み方ができた。すなわち、本作品で描かれているものは単に一郎の苦悩と孤独ばかりではなく、最初は人の「腹の中」を疑わなかった二郎が徐々に人の心を疑うようになっていく姿であると考えられる。そして、二郎に関わる描写に焦点を当てると、一郎についての描写と酷似する点が多くつかり、二郎は結局一郎と同じように人の「腹の中」を聞く立場になっていくことを明らかにした。このことから、「今語っている」二郎は一郎と同様の心境になった結果、かつて兄を批判したことを謝罪するために、昔の一郎の話を語りだしていると考えられる。また、「塵労」におけるHというもう一人の登場人物に注目することで、作品のもう一つの主題が見えてくる。Hは明らかに一郎とあらゆる側面で対照的な存在として設定されており、一郎の周りにいる他の人とは異なり、一郎のことを理解している人物であることが作品から読み取れた。不安で落ち着かない一郎は「塵労」において、一時的に精神の慰安が得られる。

以上のように、各作品において、煩悶している男性と性格が対照的に設定されているもう一人の男性に注目し、両者がどのような関係を持つのかを考えることで、作品の新しい読みを試みた。また、これらの男性たちの姿をより明確に描き出すために、女性の登場人物が対照的な存在として設定されていることが明らかになった。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (ウィリヤエナワット・ピヤヌット)			
	(職)		氏 名
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	出原隆俊
	副 査	大阪大学 教授	清 水 康 次
	副 査	大阪大学 講師	合山林太郎
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 夏目漱石作品の研究—対照的に描かれる男性たちを中心として—

学位申請者 ウィリヤエナワット・ピヤヌット

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	出原隆俊
副査	大阪大学教授	清水康次
副査	大阪大学教授	合山林太郎

【論文内容の要旨】

本論文は、漱石作品について、従来の先行研究と異なり、煩悶している男性と性格が対照的に設定されているもう一人の男性に焦点を当て、そのような男性が登場する『彼岸過迄』、『野分』、『虞美人草』、『行人』という漱石の四作品において二人の男性がどのような関係を持つのかを考え、作品の新しい読みを試みようとするものである。

「第一章 『彼岸過迄』—「平凡」の中に閉ざされる青年たち—」では、敬太郎と須永の対照的な性格、作品の構図が前半と後半で明らかに対照的に設定されていることから、須永を考察するには、敬太郎の存在も再検討する必要がある。「平凡」な生活の中で閉ざされ、彷徨いながら、それぞれのやり方で切り抜けようとする青年の姿があるとする。

「第二章 『野分』論—金銭の社会の中に閉ざされている青年たち—」では、道也と高柳を中心に論じられてきた先行研究とは異なり、物事に拘泥する高柳と、拘泥しない中野という対照的な性格に設定されている関係を考察する。そのうえで、中野、高柳、道也が自分の世界に閉ざされているとし、彼らと対照的な女性が描かれていると読む。

「第三章 『虞美人草』論—動かされていく青年たち—」では、従来、「勸善懲惡」の話として、あるいは、藤尾の存在を中心として読まれてきたことに対して、宗近、甲野、小野という男性の登場人物の行動に着目し、無力で、他人に動かされないと、行動を取れない青年たちの物語であるとする。一方、男性側に批判される「私の強い」藤尾や藤尾の母の行動から、自分の意志で動いていく女性たちの姿が明らかになるとする。

「第四章 『行人』論—一人の心を追及しようとする男性たち—」では、単に一郎の苦悩と孤独ばかりが物語られているのではなく、最初に人の「腹の中」を疑わない二郎が徐々に人の心を疑うようになっていく姿も描かれているとする。一郎とHのような対照的な二人の男性という構図は他の作品でも見られるが、Hという存在は、一郎の内面を照らし、救済しようとしているという点で、他の作品と異なっていると言えるとする。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、きわめて研究の層が厚い夏目漱石を対象として、独自の視点を打ち立てて、研究史に切り込もうとする強い意欲に満ちている。第一章の『彼岸過迄』については、従来、狂言回し的存在として十分には検討されてこなかった敬太郎という存在について、従来主人公として捉えられてきた須永とは対照的な人物として、須永に匹敵する存在として位置づけようと試みる。

この視点は、漱石作品全体に切り込むうえで有効なものとして申請者は捉え、本論文として結実したものである。そのうえで、第二章の『野分』論において、中野、高柳、道也の同一性を指摘する箇所をはじめ、第三章の『虞美人草』論でも「動かされ」なければならない男性たちとして同様の構図を指摘するなど、これまでには注目されることのなかった議論を展開している。『野分』論における御政という女性が男性たちを相対化する存在であるとの見立ても新鮮なものだといえる。四作品の分析にとどまっているが、さらに対象を広げていくことも可能であろう。

しかし、看過できない問題点も少なくない。そもそも対照的な存在だとされる男たちの存在について、後期作品から発想されたものであるにもかかわらず、手続き抜きで前期作品にも適用しようとしている部分がある。また、何よりも、二人の登場人物が対照的な存在であるとしても、それが作品内で同じ比重を占めているとはただちには言えないことである。このあたりの詰めが弱いと言わざるを得ない。

また、読みの粗さ、論理の飛躍を指摘せざるをえない箇所も散見する。部分的な箇所の捉え方を安易に全体論へとつなげている不用意も十分に反省されなければならない。『野分』十一の「風」の表象の読みについても「疾風に勁草を知る」という成語をはじめ、風をめぐる様々なイメージがあることを考慮しておらず、一面的な読みに疑義がある点なども問題箇所の一例に過ぎない。各作品のトータルな読みという観点からも全体を通して物足りない印象は否定できない。

また、ある着眼がそれにとどまっていて、正当な問いに発展していない問題点もある。しかし、それは、逆に言えば今後の研究の発展の可能性につながるとも言える。今後、ここで対象として取り上げた作品以外にも考察を広げた時に、新たな問題の発見につながることも考えられる。

このように、本論文は、より充実したものへと進化することが強く求められていると言えよう。しかし、課題を克服するための今後の精進も強く期待し、本論文を博士(文学)の学位に認定できるものと判断する。